

賀年
謹新

広報

No. 8

2022年1月

[編集・発行]

上内田地区まちづくり協議会 広報部

ふれあい 上内田

今年成人の皆さんの
上内田小学校写真

祝
おめでとう
成人



新年のご挨拶 ②

新成人に向けて ③

健康ウォーキング ④

コロナ禍中の活動 ⑤⑥

ふる里再発見〈第8回〉五百済 ⑦⑧

編集後記 ⑨

新年のご挨拶

上内田地区まちづくり協議会

会長 北 浦 充

新年あけましておめでとうございます。

2022年、皆様には清々しい新春を迎えられたことと思います。

日頃は、上内田地区まちづくり協議会の事業活動に、特段のご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

さて、昨年も世界的なコロナ禍で暗い1年となりましたが、そんな中2020年東京オリンピック・パラリンピックが何とか開催され、日本人の活躍は目を見張るものがありました。皆さんもテレビに釘付けとなり、楽しまれたことと思います。

上内田地区においては、行動制限・種々の活動自粛に伴い、折角動き始めたまち協活動が停滞、特に上内田ビジョンの具現化が進まなかったことは申し訳なく、大きな反省事項と考えています。また、イベントのほとんどが2年連続で中止となり、誠に残念な結果となりました。

良かった点は、小学校から学童保育所に通う道路が、地権者の方々のご理解とボランティア部・他有志のご協力で、県道を通らない迂回路が整備されたことです。かねてから県道通行は危険との問題提起がされていましたが、事故の未然防止ができました。健康ウォーキングコースの一部でもありますので、一度歩いてみてください。

防災関係では、地区自主防災会自立化の1年目として、地区が主管する情報交換を主体とした会議体がスタートしました。感染症対策も考慮し、更なるレベルアップを期待したいと思います。防災講座は趣きを変え、男女共同参画で行われ、各地区男女各4名が受講しました。それぞれの立場で防災意識の向上につながったものと思います。

話は変わりますが、2022年は寅年で、干支は壬寅（みずのえ・とら）です。「陽気をはらみ、春の胎動を助く」辛く厳しい冬はいずれ終わり、暖かい春が来る。言い換えれば冬が厳しいほど、春の芽吹きは生命力に溢れ、華々しく生まれる年になることらしいです。

新型コロナウイルス感染症はまだ不透明なところがありますが、ワクチンの3回接種・飲む治療薬の普及・基本対策の徹底等により、早くコロナ禍のトンネルを抜け、平常の生活に戻れることを願っています。

最後に、迎えた令和4年が皆様にとって素晴らしい年でありますよう、お祈り申し上げます。



卒業記念写真 平成26年 上内田小学校卒業生



成人式に寄せて

平成25年度上内田小学校卒業生の皆さんへ

成人おめでとうございます。

胸を張って卒業証書をもった上内田小学校の卒業式から8年が過ぎましたね。「キラキラ！6年生」と書かれた卒業アルバムを改めて開くと、キラキラ輝いた皆さんの活躍ぶりが鮮明に思い出されます。6年生の運動会では、組体操とソーラン節という2本立てのプログラムに挑戦しましたね。6段ピラミッドは今では伝説です。修学旅行では、スカイツリーや東京ドームシティなどでたくさん笑顔を見せてくれましたね。みなさんは本当にキラキラ6年生であり、掛川でいちばんの6年生でした。当時、私は家族が闘病中で、学校を休むこともありましたが、でも、みなさんのおかげで安心して留守を任せられました。他の先生も「あの6年生なら大丈夫！」と信頼されていました。今さらながら「本当にありがとう」と言わせていただきたいです。

みなさんに感謝の気持ちを伝えると同時に、今日成人式を迎えられたのも、今まで立派に育ててくれたご両親や友人など、多くの支えがあったからということをお忘れのないようにして下さい。笑顔の裏には「お陰様」「感謝」があるはずですよ。これからも周りの人に感謝し、立派なカッコいい大人になってください。

最後に卒業アルバムに書いた「カッコいい人になる方法」をもう一度。「人生の最も苦しいいやな辛い損な場面を真っ先に微笑を以って担当せよ」幸せな人生を築いてください。応援しています。

平成25年度 上内田小学校6年担任 雲母政敏

- 石川 真哉斗 さん
- 太田 和志 さん
- 佐々木 了 さん
- 鈴木 悠 さん
- 田中 龍 さん
- 土屋 修斗 さん
- 角皆 大斗 さん
- 土井 貴陽 さん
- 平野 晃大 さん
- 福井 洸平 さん
- 福島 耕佑 さん
- 松本 響輝 さん
- 村松 信 さん
- 麻生 なつみ さん
- 大瀧 夏未 さん
- 堺 由美子 さん
- 鈴木 美古都 さん
- 富安 真央 さん
- 平野 結菜 さん
- 松本 茉奈 さん
- 村上 寧音 さん



健康ウォーキング



12月12日(日)健康ウォーキングが開催され、60人を超える方が参加しました。
 当日は、師走とは思えない暖かく穏やかなお天気に恵まれ、絶好のウォーキング日和となりました。
 学習センターをスタート、塩の道を歩き段金谷公会堂へ、安斉橋を渡りキウイフルーツカントリーへ、五百済川沿いの道を歩いて平野園へ、ハニーバス前を通り茶畑の中の道を通って下板沢公会堂へ、そしてゴールの学習センターに戻る計5.9キロのコースです。
 茶畑の道や日頃歩いたことが無い小道を歩いて、初冬の日、上内田の自然を満喫できました。

ゴール後

ゴール後のお楽しみ
ビンゴ大会、時間当てクイズ、じゃんけん大会

スタート前

受付で体温と体調チェック
全員でラジオ体操

茶畑の向こうに粟ヶ岳を望む

平野園さんでお茶、干し芋、冷凍イチゴをいただきました

平野園さん
こちそうさまでした!!

茶

茶畑の中を歩く

五百済川沿いの道を歩く

下板沢公会堂
トイレ休憩

平野園さん
休憩

下板沢公会堂からの富士山

学習センター
スタート & ゴール

キウイフルーツカントリーJapanさん

キウイフルーツカントリーJapanさん
お話

段金谷公会堂
トイレ休憩

キウイフルーツ棚の下で
キウイと農園のお話を聞く

ハニーバスさん

下組

市立上内田小

はやの小

茶の庭

長生堂眼科医院

平熱

1年半
続いた

コロナ禍中の活動の一部

交通安全



学童保育安全路



食推協 メンズクッキング



食推協 子供クッキング



食推協 味噌づくり



健康体操



防災部 女性のための防災講座



ボランティア部 檜坂トンネル清掃



ボランティア部 グランド草刈り



ふれあいいきいきサロン



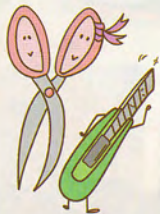
女性セミナー 手芸講座



女性セミナー コケ玉づくり



女性セミナー
ハイドロカルチャーづくり



切り絵



ふる里再発見 第8回 五百済

五百済は「イオウズミ」というのが正しい読み方ですが、普段は訛って、ヨウズミと呼ばれています。地形を見ると解りますが、周囲を山や高台に囲まれ、盆地状になっており、昔はここに水が溜まってかなり大きな池になっていたというのが古老の言い伝えです。

この地形はほぼ中央部に「池ノ本」、北の山寄りの方に「びつたら」という地名が残っています。「びつたら」というのは波がびちゃびちゃと打ち寄せていたという擬音から来たものであろうとされています。

昔（と言っても時代は不明）この池で獲れた鮒五百尾を納めればそれが年貢の代わりになったということで、五百で済んだから五百済（イオウズミ）という地名になったと伝えられています。



【参考文献・画像引用】 市政五十周年地区に伝わるお祭りと歴史の紹介

福寿山 龍登院 (曹洞宗) 本尊 聖観世音菩薩



創建は永正年間(1505～1520)、永江院三世然室與廓和尚(奥州藤原氏の末裔)の開山で、今川氏の外護を得て造営されました。法嗣鳳積禅師も奥州の人で、山容は平泉の中尊寺に似ています。無住の時代が長期にわたり、焼失のたびに再建され今日に至っています。元和5年寺領高二石。境内堂の観永堂は観永寺で天明8年に再建し明治17年に移築されました。(平成26年

新築の本堂に合祀) 鎮守の白山社があり、薬師如来は東連寺から移されました。表口石段西側の摩利支尊天は明治37年日露戦争の時、戦いの軍神として二俣光明寺より勧請。寺宝に若一王子神社旧蔵の大般若経(写経・室町初期藤原光久・清悦等筆)を保管しています。

【参考文献・画像引用】 上内田地区の神社仏閣

五百済の偉人

小林源四郎・太三郎

～親子で地域茶業の礎を築く～



小林源四郎

村のお寺である「福寿山龍登院」の山門横に上内田地域のお茶の開祖「小林源四郎」の石碑があります。明治6年、村の戸長になった源四郎は段学校（現在の龍登院）を作り、その後、1875年（明治8年）に板沢学校（現在の福田寺）と合併させ、共和学校（現在の上内田小学校）を作りました。また、宇治の茶に魅せられ、茶業への関心が深く、お茶が国家的産業であることを確信し、用水を整備するとともに自己の山林1町歩余りを開拓して茶栽培を始めました。さらに、製造技術である手もみ製法も修

得し、村民を指導奨励しました。

そして明治16年、源四郎の息子「小林太三郎」は「上内田製茶共同販売益集社」を創立し、再生から販売まで、直接横浜の「大谷嘉兵衛」と取引をする大事業を完成させ、地域茶業の礎を築きました。【参考文献・画像引用】掛川偉人物語「この人に学びたい」及び平野園ホームページ



龍登院 山門横の石碑



現存する研修所後の建物

上内田の農業協同組合

共同組合の発達史の第1頁には必ず「遠州の益集社」のことが書かれています。この益集社こそは、明治16年にお茶の共同販売組合として我が上内田に初めて創設された組合で、販売組合の第一先駆を成しています。

そして益集社が最も活躍したのは、明治28年の日清戦争後、お茶の貿易が非常に盛んになり、組合長 小林太三郎は横浜の茶商 大谷嘉兵衛氏と取引し、小笠郡下各村に奨励して16か村に共同組合を作らしめ、その連合会長となって共同組合の連合指導に当たりました。【参考文献】「郷土の横顔」森下光南

立ち上がった静岡の茶産地（協同組合の発達史）

幕末の開港以来、生糸及びお茶が重要な輸出商品となり、明治に入ってから輸出高は目覚ましく伸びていきました。しかし、利にさとい外国商社とそれにつながる買い付け商人は、生産者農民の無知に付け込んで産地における安値での買いたたきに走り、産地の側でも粗製乱造による粗悪品が横行し、それが安値に拍車をかけていました。長い封建時代からいきなり貨幣経済に巻き込まれた産地は崩壊の危機に瀕していたのです。

かくてはならじと、まず立ち上がったのは静岡県の生産者でした。静岡県は、維新の敗者である幕臣の集団入植などもあり、茶業の中心地として知られるようになっていました。そして地元で生産、加工された荒茶が悪徳商人によるすさまじい買いたたきにさらされていました。

打開策を探るため磐田郡南部の茶業者が集まり、代表者を横浜に出したところ、そこでの取引価格と現地での買取価格とのあまりの格差に驚きました。相場に無知な農民がバラバラに庭先で取引していることが安値の原因、と知った彼らが最初の共同販売に踏み切りました。そして1879年には小笠郡内田村に「益集社」という共販組合が設立されました。これは養蚕の盛んだった群馬の「碓氷社」と並んで先駆者でした。【参考】JA ホームページ

〈訂正〉 前号（第7号）p4「小笠川水系」の記事の中で「福井の養蚕産地」という記述がありましたが、正しくは「群馬の養蚕地」でした。お詫びし訂正させていただきます。

編集後記

1年半続きのコロナ禍中、まだまだ油断できませんがやっと一息ついて参りました。暗い世相の中、気を付けながら心あたたまる活動を提供して下さった皆様方、有難う御座いました。

生きがいを紡ぐ一年に繋がったかと思えます。我々も老若男女問わず、あたたかなコミュニティ活動に参加し心豊かに過ごしていきたいものです。

〈本誌の掲載内容について〉参考文献などによる一説であり、諸説ある場合があります。